　　　　通信第八十号　わからないご法話を聞きぬく

日程が立て込み、また腰痛が出ましていつもより通信が遅くなりました。次々とご法縁が展開して来ます。一貫して流れているのは「ご本願に生かされ、ご本願をお伝えしてゆくこと」に帰します。大石先生が田んぼ道を散歩されながら、「本願が信じられたら人生に一本筋が通る」と仰せられました。ようやく生活を通してうなずけて来ます。

十月八日の夜、電話がありました。Ｍさんの法友からです。「突然ですが、Ｍさんが亡くなられました。葬儀は明日です」「明日は輪読会があります。何時からですか」「十二時です」「それなら、なんとか行けます」

Ｍさんは忘れたころにひょっこり奥様と尋ねてくださるお同行さんでした。九十才を過ぎ、大きな会社は息子さんに譲られていました。はじめて来られた時からの問いは「叔母は貧乏で薄幸な人だったが安らかで、お念仏を喜ばれて穏やかに最後を遂げられた。わしはそれが出来ない」と言われるのが常でした。私は蓮如上人の「御一代記聞書」の中にある「堺（大阪府堺市）のさんにならんでくださいよ」と申し上げてきました。

聞書き第七十三条には

（現代語訳）

蓮如上人が言われました。「亡くなった堺の日向屋は三十万貫の財産をもった大富豪であったが、この度は死んでも仏にはなれないであろう。大和の了妙は（裏をつけない衣服。ひとえもの）ひとつ着ることのできない貧しい暮らしをしているが、この度は仏になるに違いない」と、このように仰せられたということです。

　（要義）

生きてゆくためにはお金は必要不可欠である。しかし、この人生が意義あるものとなるかどうかはお金の

有無によるものではない。ただ信心をするかどうかにかかっているのである。

蓮如上人御一代記聞書　細川行信　村上宗博　足立幸子著　法蔵館刊　１００頁

Ｍさんが私に言いました。「あんたほどよくやっている僧侶を私は知らないが通信は難しくてわからん」、昨年でしたか「難しいからもう通信は送ってこなくてよい」という連絡がありました。けれども法友のⅠさんが「やはり送ってあげて下さい」と言われるので送り続けて来ました。

このたび葬儀に参列させて頂いて、三人のお孫さんのお別れの言葉を聞かせて頂き、Ｍさんがお孫さんの一人ひとりを尊敬され、拝んでいたことが伝わってきました。法友のⅠさんは弔辞で「Ｍさんは長仁寺の住職さんに分からん、分からんと言いながら究極のところを聞かれていました」と述べられました。地域の何人もの方の鼻をすする音が聞こえました。

私はお焼香のあと奥様のところへ行き「遂げられましたね。如来様に仕上げていただきましたね」と申し上げると、奥様もこらえていた感情がこらえきれずに泣かれました。そのまま輪読会に急いで寺に帰りました。道中、「後味のよい葬儀だったな。こういう葬儀は大事だな」二十願の「の誓い（必ず遂げさせる）まことにゆえあるかな」の声なき声が聞こえて来ました。わからんご法話をご縁にもち続けられたと思い知らされた事でした

さて、宇佐組の女性門徒の会から、ご法話の依頼がありました。場所は四日市別院です。それについて、打ち合わせのために四人の役員さん方が長仁寺に来て下さり、ご法座となりました。その中で、テーマについて語りあいました。決まったのは「願われている私をたずねていこう」となりました。

四日市別院は思い出のある場所です。大学の頃、授業を聞いてもおもしろくなく、やめようかと悩んで大分に帰っていました。田んぼ道をあてどなくうろうろしている時に眺めた空は、どんよりとして暗い空でした。「俺の心とそっくりだな」とつぶやいたことです。父が「別院で伝道講習会をやっている」というので、どうせ何もすることもないので参加しました。そこで大谷専修学院の竹中智秀先生と出遇い、浄土は肉体が死んでからでない、清沢満之先生の精神界はそのことを教えてくれている事を知らされました。京都に帰り、大谷大学に籍はおいて、専修学院の聴講を受けさせて頂きました。信国淳先生（宇佐市出身）が院長としておられました。歎異抄・和讃の講義など聞かせて頂き帰り道に感動して涙が出ました。この講義に参加していればあの真面目な先輩も自死することは無かったのにと思わされたことした。そういうご因縁のある別院であることも話させて頂きました。

　この頃、ご法話させて頂きつつ、私が聞かされ、お育てを受けています。そこで、私自身が「何を願われ、求めているのかが問われました。そこに聞こえて来たのは「本願に生き、本願をお伝えしていく」と言う事でした。自分が話させて頂き、自分に聞こえて有難かったです。何かご参加の皆さんに届いたものがあったのでしょうか。入口に並べていた最近出た私達の本を予想以上に買って下さいました。

　この頃、リモート法座で参加者の進展が画面からもうかがえます。向こうからの世界が開かれてきたのでしょう。かつて視聴させて頂いた「ＮＨＫ宗教の時間」の中で鈴木大拙先生の秘書を長くされておられた岡村美穂子さんが言われたことが強く印象に残りました。朝日が昇る窓辺に岡村さんを呼ばれて「ほら、本願が昇る、本願が昇る」、と。今、私自身が明るくなって、あのお言葉が本当にうなずけます。夜の暗闇ではせっかく花が咲き黄色や赤や白の色を付けていても、見えません。あって無きがごとしです。鳥の声もしませんし、鳥や蝶々の飛ぶ姿はありません。人の存在も恐ろしく感じます。私達の精神界も同じです。

私の暗黒の時代は自分一人で「俺が、俺が」とこちらから見ていますから、まわりの宿業の色や輝きも見えず、聞こうともしていなかったのです。自分自身が嫌いで、人が嫌いでした。いつももがきがんばっている思いはあっても堂々巡り、飛ぶことも出来ず、宿業の声も聞こえていません。ご本願の声が出ないのは必然のことであったのです。

大石先生が「江本さん、あなたが一生二生、火のように頑張ってもどうにもなりませんよ。無始より将棋だおし（法にき、疑ってきた自分の業の歴史）があるのです。ただし、本願が信じられたら、たちあがれるのです。（闇が晴れるのです）」。「ええ！」と私は心の中で叫びました。それから聞法の姿勢が「本願が信じられるということはどういうことなのか」と変わっていきました。「人間の理知で分かるはずはない。だから、わかる、わからんでなく、人間を超えたわからない世界。大石先生を生かしめているご本願が私自身でもわからない私の重病の根源を照らし、して下さっている。分からんでも先生の前に座らせて頂こう」とならされました。ここは新興宗教のようで危ないところですが、先生のご法座の後はいつも身心が軽くなり、元気が出て来る事実がありましたから、聞きぬいていこうとならされたのです。

親鸞さまは「信の巻」の中に、重病人はこちらからの声聞、縁覚、菩薩の二乗の教えを聞いても治らない。（むこうから）の仏、菩薩に従いて聞法することによってを得て病が治る（真宗聖典２５２頁）とあります。

夜が明けてくるとそれぞれの宿業の色、声、飛ぶ姿が見えてくるのです。新しく明るい世界が初まるのです。藤解先生の法話テープに「太陽が出て明るくなっているのに、懐中電灯を持って歩く馬鹿はおるまいがや」とおっしゃっておられます。

　若い頃に学んだ教えも生きてきます。「経典」の中にあるお譬えです。

　　「例えば街道を歩み行く人があって、その人が大きな幅広く深い水流を見たとしよう。こちらの岸は危険で恐ろしく、あちらの岸は安穏で恐ろしくない。しかも、こちらの岸からあちらの岸に行くのに渡し船もなく、また橋もない。彼はこのように思った。

　『これは実に大きな水流である。～さあ、わたくしは草・木・枝・葉をあつめてをくみ、その筏に依って、手と足でもって努力しながら安全にあちらの岸に渡ろう』と。そして渡ることができた。そこで彼は次のように考えたとしよう。

　　『この筏は実に私に益するところが多かった。～努力しながら安全にあちらの岸に渡り終えた。さあ、私はこの筏を頭にのせて、あるいは肩に担いで欲するままに進もう』と。比丘たちよ、汝らはこれをどう思うか。～～～

　　比丘たちよ、このように、執着から離れしめんがために私によって筏の譬えが説かれたのである。諸法（法執）もまた捨てられるべきものである。まして非法（我執）をや」と。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　仏教聖典　２３４頁

　十九願（自力の在り方）、二十願（半自力半他力の在り方、十八願（絶対他力の新世界）の有り様がしめされています。はからいをすてて、本願をよりどころとする人生が始まるのです。本願に帰依しないと、自分のはからい、考え、経験をよりどころとした執着が捨てられないのです。筏をかついでいる自分のすがたが見えて来ないのです。自分のに自分がはまり、相手も自分のにはめようとするのです。そこには窮屈さや反発がおこります。

　「リモート法座に続けて参加したお陰で、朝の散歩にお月様や星や太陽や草花が見えてきました。いままで身近な人に対してもいいと思ってこちらから、こちらからしてきました」。日田市のｋさんの明るい声と顔が参加者にも伝わり皆さんも喜ばれました。また、最近、ユーチューブ江本常照を見て、福井県に行くのでしたらぜひお遇いしたいとの電話を頂きました。中浜さんと十日にお遇いして聞かせて頂きました「今まで窓を開けたら田んぼしか目に入らなかったのが、太陽や草花、鳥の声や姿が見えるようになりました」とうれしそうな明るいお顔に私が救われました。

九日、富山県南砺市の浄円寺（重共聡）本願道場にったところ、藤井貢師が桐箱をもって部屋へ入ってこられました。「この藤解先生の九字名号はあなたのところにあるのがふさわしい、ぜひ持って帰って下さい。私のところには慈悲深く柔らかい先生の六字名号がありますから」。　驚いて、さっそく重共さんが掛けるための金具をにかけお名号を開きました。何と広やかで、力強く、達筆です。真剣さ厳しさ、重さがあり、言葉に詰まりました。「大変な覚悟がいるな」。という直感と、大石先生そして藤解先生が「わしは入るぞ」と機縁熟して私に、長仁寺に入って下さった、直感でした。恐ろしいような嬉しさでいしました。

五日後の十四日、長仁寺にて若い住職・坊守、私達の四人で藤解先生のお名号を大石先生のお名号と並べておかけいたしました。

　高岡浄円寺様の帰路、福井駅で下車、岩佐幸子様宅にて中浜好美さんと三人で座談。それから、（蓮如上人の際にお立ち寄りされる寺）様へ初めて行かせて頂きました。住職の辻森さん、坊守の育子さんご夫妻とは本山の役宅で共に過ごしてから四十年ほどたちました。辻森さんは教務所長や別院輪番などを歴任されました。坊守さんが若いときの私の印象を語られました。「堅くて本を読んでいるイメージでした。柔らかくなって別人のようですね」と言われます。「私もそう思います」と返答しました。十年前に建ったという立派な門徒会館には住職達の願いのお言葉が何枚も貼られていました。「寺をひらく、心をひらく、私をひらく」が眼にとまりました。

藤田清美さん、木嶋ひとみさんも加わり座談会がひらかれました。私は辻森さんとお別れしてからの四十年間の歩みなどを話させて頂きました。まさに「寺をひらく、心をひらく、私をひらく」ご縁となりました。翌十一日は恵美英丸先生の運転で桜の大木で有名な西雲寺さんへ行ったり、おいしいそばの御馳走になりました。今後、福井のご縁がひらかれる喜びで帰路につきました。

長仁寺を発つ前日の夜に掲示板を書かせて頂きました。

なだけの自分であった

人の上にあがりたいだけの自分であった

それを知らされた時

光明の世界が開けたのですから、行き詰まることも

仏様からのご（おさしむけ・おはからい）です

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大石法夫先生

逆境も順境も超えさせて頂けるのはご本願のお陰です。師恩、仏恩のほかありません。

　「南無阿弥陀仏は御礼ですよ」と大石先生のおおせです。身に沁みます。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　合掌

令和六年（２０２４）十一月中旬　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝